

有吉佐和子『和宮様御留』論

— その創造の方法をめぐって —

高橋与四男^{*1}

A Study of *Kazunomiyasama-otome*
(*A Diary about Princess Kazunomiya*) by Ariyoshi Sawako
— About the creative ways —

Yoshio TAKAHASHI

Abstract

A novel, *Kazunomiyasama-otome* (*A Diary about Princess Kazunomiya*) by Ariyoshi Sawako, was serialized in the literary journal *Gunzoh* from 1977 to 1978. It was also published in full by Koudansha in 1978. Ariyoshi related the story, through use of historical fact. The story has as its framework the tale of Princess Kazunomiya who married General Tokugawas, Iemochi. In the novel, she created the hypothesis that two girls took the place of Princess Kazunomiya. Historians, however, presented counter arguments to her hypothesis, which she did not address. I feel that the reason why she did enter this debate is, because the most important thing in fiction for her is not whether the story should be true but how well she can make the readers aware of the reality within it. In short, an author should write any work that we could read on and experience appreciation in it.

One of the themes of this story relates is the short life of a poor girl, named Fuki who was fourteen years old and was driven to death as a result of her taking the place of the real princess. As Ariyoshi herself asserted, it is not problem whether Fuki really did take the place of Princess Kazunomiya or not. The point is how well reader can experience this reality. So, in this paper I have analyzed some creative ways and the mechanism by which this novel causes our hearts to stir.

はじめに

小説『和宮様御留』は文芸誌『群像』の昭和五十二年(1977)一月号から五十三年(1978)三月号までに連載されたが、作者の有吉佐和子が1984年8月に五十三歳で急逝しているので、これは晩年の作ということになる。この後『有吉佐和子の中国レポート』(1979年)と『日本の島々、昔と今。』(1981年)のドキュメンタリーを挟んで『悪女について』(1978年)と『開幕ベルは華やかに』(1982年)という二作の長編小説があるだけである。これまで、代表作の『紀ノ川』(1959年)や『出雲の阿国』(1969年)など、女性の生命力や母性的なるものを川に重ねて描いた作品、それに『恍惚の人』(1972年)と『複合汚染』(1975年)と

いう、社会問題を扱い、当時超ベスト・セラーになった作品を次々に発表してきた有吉にとって、『和宮様御留』は人生の終焉を真近に控えた時期での、いわば最後の輝きにも似た傑作であると言えよう。

この作品の文庫化に当たって、「あとがき」で文芸評論家の篠田一士氏が、絶賛とも言える高い評価を与えている¹⁾。そこでも篠田氏が述べているように、この小説は幕末から維新にかけての史実を枠組みに据えて、皇女和宮の降嫁という、紛れもない事実の裏に隠された一人の少女の悲劇を描いている。そしてこの物語は、当時の将軍・徳川家茂に嫁したのは、本物の皇女和宮ではなくて替え玉、しかも一人ではなく二人もいたという仮説に拠っている。

この場合、和宮の替え玉説など根も葉もない戯言であって、それは作者の単なる想像上の作りものでしかないので

2005年5月16日受理

*1 東海大学海洋学部清水教養教育センター (Department of Mathematics School of Marine Science and Technology, Tokai University)

は、という批判が湧いてきても当然であったろう。事実、この作品が発表された当時は、相当反論が唱えられたという²⁾。これに対して当の有吉は、一々に答えてはいなかったようだ。この有吉の対応の仕方は、ある意味で正解であって、本人もはっきりと述べているように、事実かそうでないかは問題ではなくて、そこで紡ぎ出された物語が、如何にリアリティを持つか、ということこそ問われなければならないからである³⁾。そのような、作者の創作上の心構えや覚悟によって、この『和宮様御留』は、虚構とは如何なるものかということ逆説的に明解に示すことになり、その結果これは典型的な虚構の物語として成功していると言える。

そこで、この小論においては『和宮様御留』という小説が、如何に読者にリアリティを感じさせ、ひいては感動を呼び起こすことになるのか、について論ずることとする。

(1) 和宮とその時代

和宮^{ちかこ}親子内親王は弘化三年（1846）仁孝天皇と新典侍橋本^{つねこ}経子との間に生を受けている。この姫宮にとって最初の不幸は遺腹の子、すなわち父天皇は和宮が生れる前に崩御されていることだ。そして和宮六歳の時、有栖川宮の熈仁親王の王子熈仁親王と婚約しているにも拘わらず、万延元年（1860）時代の流れと幕府の都合によって、将軍徳川家茂への降嫁が画策されることになる。

当時の時代状況は安政の大獄（1858年）に象徴されるように、政情定かならぬところであった。この頃外国籍の艦船が次々と来航し、鎖国日本に対して外から警鐘が打ち鳴らされていた。この厄介な外部からの侵入に対して、日本は幕府と朝廷が共に力を合わせて立ち向かう、いわゆる公武合体こそが急務であると考えられた。朝廷としては尊皇攘夷の立場で、外敵から日本を守るために外国船を近づけないよう幕府に要請したが、外国勢の日本への接近という、「この一事は従来政治の圏外におかれていた朝廷が、外患を契機として国政に関与し、政権回復への道を歩きはじめたことを意味するものであった。」¹⁾一方、幕府としては多くの外国の度重なる開国要求に対し、穏便で平和的な計らいを取りたい所存であり、各国に対し外交通商条約を取り結ぶほうが得策と考えた。しかしながら、名目上は公武合体とは言うものの、「朝幕間の協調・互譲による一体関係をさすよりはむしろ政治は幕府に一任し、朝廷は幕府の施政をそのまま容認することを原則とした、いわば幕府優位の朝幕関係を意味するもので」²⁾あった。

この公武合体策を実行するために、より効果的な案として浮上したのが、天皇家からの徳川将軍への降嫁であった。そこで和宮がその候補に上がり、紆余曲折の後、ついに決定された。ところが、ここで和宮の強硬な拒否に会い、事態の進展は難航することになった。和宮がこの結婚話に抗った主な理由は、既に公家の熈仁親王との婚約がな

されていることがあったが、それよりもっと重要なことは、将軍家の嫁として江戸に赴く（＝東下）ということは、生れ親しんだ故郷の京都を離れることになり、更に当時としては十分恐怖の対象となり得たであろう、外国人の多いところへ出向くことの心細さであった。また、和宮には足が悪い（関節炎らしい）という風説があったようで、このことも十四、五歳の思春期の最も感じ易い乙女心にとって、遠く離れた見も知らぬ地へ旅立つことを躊躇させた真意であったかも知れない。

「かくて朝幕間の交渉は、同床異夢ともいえるべき関係ながら、ようやく意見の一致を見ることになり、天皇は遂に和宮の降嫁を決意された。」³⁾しかしながら、このような不憫な我が子を慮って、生母の経子（薙髪して観行院）は、行きたくもない地へ無理矢理追いやることに忍びなく、ここで一計を案じて、和宮の替え玉を使った、というのが有吉の仮説であった。

そうこうして、和宮は文久元年（1861）十月二十日京都の桂御所を出発し、十一月十五日江戸に入り、九段の清水邸に到着した。十二月十一日「清水邸を出で、大手門より江戸城本丸の大奥に入興され、翌文久二年二月十一日、将軍家茂と婚儀を上げられたのである。」⁴⁾その後、時代の混迷を象徴するかのように風雲急を告げ、夫の家茂は慶応二年（1866）七月二十日、わずか二十一歳で死去する。これを受け、同い年の和宮は二十一歳の若さで未亡人となり、薙髪して静寛院宮を名のることとなった。明治十年（1877）八月「和宮は図らずも脚気を発病、侍医の勧めによって箱根塔の沢へ湯治に赴かれたが、九月二日俄かに衝心の発作が起こり、同地の旅館環翠楼で薨去された。時に御年三十二であった。」⁵⁾

(2) 和宮替え玉説の誕生

そもそも有吉は、どのような経緯^{いきさつ}で和宮替え玉説なるものに思い至ったのであろうか。『和宮様御留』の有吉自身の「あとがき」によれば、東京に住む旧名主の一婦人が有吉を訪ねてきて、次のような話をしたことが最初のきっかけであったらしい。「和宮様は私の家の蔵で縊死なすったのです。御身代わりに立ったのは私の大伯母でした。増上寺の御墓に納っているのは和宮様ではありません。（略）板橋本陣で入れかわったのです。」¹⁾有吉はこの話を聞いて、最初は信じる気にはなれなかったが、後々和宮についての史料に当たったり、様々な謎について思いを巡らせているうちに、ひょっとしたら、と気が変わり、あとは小説家の創造力と想像力の両翼が自由に羽ばたくのに任せて、『和宮様御留』が生み出されることになった次第である。

次に、有吉の和宮替え玉説をより強固に押し進めた主なポイントを挙げておくと、

- 1) 和宮は、今で言う関節炎で足が悪かったにも拘らず、昭和三十四年（1959）に増上寺の和宮の墓が発掘

された際には、両足の骨に異状は認められなかった。

2) 増上寺で作られた塑像や、習字の際の絵姿には、左手首より先がなさそうだとすること。上述の発掘でも骨は見つからなかったらしい。和宮が東下する前、京都にいた時に、藪内流のお茶の稽古や琴の練習を行っているが、左手首がなかったら、それは不可能である。

3) 「あの有名な徳川家を救ったと言われる手紙が武家言葉で書かれていることと、あの水も漏らさぬ論理的な文章と、宮様が残された短歌が、あまりにか弱いのと、別人が書いたとしか思えなかった」²⁾。

4) 和宮のものと伝えられ、夫家茂の棺に納った毛髪（黒髪）と、増上寺の和宮の髪（赤毛）が違っている。

以上のような観点から、有吉が替え玉を一人ではなくて二人も用意しなければならなかった事情が了解されるであろう。

この他に、有吉の替え玉説の更なる手掛かりとして、和宮降嫁の十五年前に、実際に替え玉の前例があったということだ。しかも、それを実行したのが、和宮の生母である観行院の伯母に当たる人（＝勝光院）であった。観行院の身近に、このような人がおり、和宮降嫁問題の解決に一役買ったとすれば、観行院が我が娘の替え玉作戦を実行するのも、けだし自然の流れであったかも知れない。

また、実際はあとで事実でないことが分かったのだが、「勝海舟の『氷川清話』の中に、和宮様が將軍家茂と天璋院と揃って御浜御殿にいらした時の話が出てきます。宮様のお履物だけ上の段にあって、家茂の草履が沓脱石の下にあった。それを見た宮様がピョンと飛び降りてご自分の草履と家茂の草履を置きかえたというものです。これを読んだ時、すぐ変だと思いました。侍女が大勢いるというのに、宮様ご自身がなさるはずがない。第一、宮様はおみ足が悪い。ピョンと飛び降りることなど出来るはずがない。」³⁾少し長い引用になったが、有吉自身も認めているように、意外とこのようなヒントからきっかけを得て創作に向かうということもよくあることではなかろうか。

(3) 冒頭の場面について

有吉佐和子は、物語性の強い作家であり、良きにつけ悪しきにつけ、話の面白さということでは定評があった。有吉の多くの作品において、特にその冒頭の部分に大きな魅力があって、読み始めるとすぐに読者をグイグイと物語の世界に引き摺り込まないではおかない。この『和宮様御留』もその例に漏れず、書き出しの部分が優れており、この全編を読み終えてから再び初めに戻って読み直すと、作者の創作意図が明らかに読者に伝わってくるし、或いはここにおいて創造の方法の一つが了解されることになる。

『和宮様御留』の冒頭の場面は異様に明るいが、もちろん作者は意図的にそうしているのだ。なぜなら、この後に

続く物語の展開が暗くなるばかりであり、最後には主人公の少女の狂死という真っ黒な暗闇の中で終えるからである。この明と暗の鮮やかなコントラストの極みは、読者を尋常ならざる感動へと誘う一つの要因ともなっている。

太陽が燦々^{はしため}と降り注ぐ橋本邸の中庭で、この屋敷の婢として奉公している主人公の十四歳の少女・フキは井戸の水汲みをしている。井戸の水汲みに無上の喜びを感じているフキは、まるで井戸の周りやその屋根に生えている草木を彷彿させて、ほとんど自然の一部であるかのように健康そのものである。釣瓶^{つるべ}を使って、井戸の奥から水を汲み上げ、一旦手桶に移し、それを厨にある甕^{かめ}に入れ替える一つ一つの作業が、あたかも生き物のように小気味よく活き活きと描かれている。この生命感あふれる一連の作業で、彼女が身に着けている粗末な一枚の衣類が水浸しになってしまい、するとそれを脱いで素裸になり、縄に干して乾くまで蹲って待つ姿に、数年後病弱になり、ついには狂死へと落ちていく運命など微塵も感じられない。この明と暗、幸福と悲劇の落差の大きさに、読者は涙を誘われずにはいられない。ほとんど小動物にも似た、素朴で純粹無垢な、大人の世界の汚れも知らない、いたいけな一少女が、大人たちの身勝手な都合に翻弄されて、挙げ句の果てに哀れな死へと追いやられてしまうとは。

この物語のクライマックスは終末近くの、この少女・フキが狂死を余儀なくされる場面であろうが、それは冒頭のこの上ない明るい描写があってこそ初めて生きてくることになるであろう。従って、読者は全編を読み終えた後、どうしてももう一度最初の場面に戻りたい気持ちに誘われるのではなかろうか。そもそも、有吉の代表作においては、この『和宮様御留』に限らず、例えば『紀ノ川』にしろ『香華』(1962年)にしろ、或いは『出雲の阿国』でも、一度読了した後で、何とも名状し難い一種の懐かしさが込み上げてきて、最初に戻って読み直したくなるように構築されているように思われる。

(4) 「コンコンチキチン、コンチキチン」について

上述のクライマックスの場面において、極めて重要な役割を持つと考えられるのは、「コンコンチキチン、コンチキチン」という祇園囃しの鉦の音である。もちろんこれはフキの発する擬声音であるが、実はこの囃し言葉は、先の印象的な冒頭の場面で、既に一度フキの心の中で鳴り響いていたのだ。そして、このさり気なく差し挟まれた祇園囃しが、やがて本編最大のクライマックスで決定的な効果を発揮することになる。

まず、紆余曲折があってようやく和宮が將軍家へ降嫁することになり、宮様一行が東下する段になって、和宮（＝フキ）が最も頼りにしていた側女の少進が姿を消してしまう。そもそも、名もない婢が姫宮の身代わりなどとても恐れ多くて、かなわぬ役柄であったにも拘らず、宮の実母の

観行院や側女たちの策略に謀られて、まるで綱渡りのような危険と不安に苛まれながらも、2年ほど止むを得ず何とか“影武者”を務めていたが、それも取り敢えず本物の和宮が傍に居ればこそ頑張っていたものを、その宮様がある日突如いなくなり、今度また唯一人頼りにしていた少進が姿を消したとなれば、フキの心中がただ事ではないのは火を見るより明らかであろう。

そこへもってきて、徐々に江戸へ近づくにつれてフキを取り囲む観行院や宰相典侍の庭田嗣子、それに命婦の能登といった、フキからすれば敵でしかない女たちが、露骨にフキを粗末に扱い出すようになっては、フキとしてはたまったものではない。フキの我慢も限界に達し、狂気の一步手前まで精神のバランスを崩したとしても少しもおかしくはない。“もはやこれまで!”と思い詰めた矢先に、あの少進がようやく目の前に姿を現したのだから、フキのこらえにこらえてきた感情が一気に噴き出したとしても何ら不思議ではなかった。そこで、少進に抱きかかえられたフキが、思わず「違うのえ。違うのえ。私、宮さんやおへん」という、悲痛極まりない悲鳴ともつかぬ言葉を発する。その直後、狂気に陥ったフキの口から例の祇園囃し「コンコンチキチン、コンチキチン」が飛び出してくるといふ次第である。

フキ自身にとっては、この囃し言葉は、いわば彼女の心の故郷であって、それ故にこれを唱えるということは、自分自身に立ち戻ることであったが、傍から見ればとんでもなく場違いな、まさしく狂気の沙汰としか映らないに決まっている。そこで観行院たちは一策を講じて、役に立たなくなったフキの代わりに、もう一人の偽の和宮を用意することになる。切り捨てられたフキは、その偽宮の実家へと連れて行かれ、ここでも「コンコンチキチン、コンチキチン」を連発してしまう。ところが、この時この囃し言葉は、意外な役目を果たすことになる。すなわち、自分の娘(＝宇多絵)を宮様の身代わりとして連れていかれたこの名主の主人は、代わりに連れてこられた宮様(＝フキ)の祇園囃しを耳にして、狐に憑かれてしまったと思ひ込むのだ。断るまでもなく、狐の鳴き声の「コンコン、コンコン」という擬声音からの発想によるが、事の真相を何も聞かされていない名主は、この場面のフキを頭から宮様と信じており、まさか第一番目の身代わりの婢などとは、夢疑ってはいないことを読者に知らしめる結果となっている。そうして年月を経た昭和の中頃に、既述のように、その名主の一御婦人が有吉を訪ねてきて、増上寺に眠る和宮は別人であり、本物は自分の家で縊死したという話を語ることになる。

そして最後に狂死する場面。名主の家に連れ込まれたフキは、その家の蔵で一晩過ごすことになる。翌朝蔵の窓から射す陽の光りで目が覚め、「さあ、待ちに待った井戸の水汲みだ!」と、狂気の頭の中で叫び、例の「コンコンチキチン、コンチキチン」を声に出して調子を取りながら、

腰に巻かれている腰紐を釣瓶の棕櫚縄に見立て、それを上の梁に掛けて水を汲む幻を見るが、つい足を踏み外して下へ落ちると同時に、その腰紐が首に絡んでそのまま縊死してしまう。ほとんど自死とも言えるような哀れな最後であった。

この辺の「コンコンチキチン、コンチキチン」という祇園囃しにまつわるエピソードは、見事と言うしかなく、まさに作者の創造の方法の冴えとでも表現すべきであろうか。ここにおいて、史実に合っているかどうか、というような議論などフツ飛んでしまうほどリアリティを感じさせてしまうのではないか。¹⁾ ついでに言えば、子供なら誰でも喜びそうな「コンコンチキチン、コンチキチン」という囃し言葉には、それを口走る少女に、嫌が上にも汚れを知らない素朴で無邪気なイメージを喚起されることになるであろう。

最後に、この「コンコンチキチン、コンチキチン」との語呂合わせから「コンチキショウ、コンチキショウ」を連想させ、それはあたかも少女フキの恨み節とも取れるようではないか。つまり、狂死に至るまで追いつめられた、この数年間の悲運に対する恨みつらみの、無知で哀れな幼い一少女の、せめてもの訴えとして読み取れる。このように、この囃し言葉に込められた重奏的な意味・味わいが、すべて一緒くたになってフキという、いたいけな少女に対する憐れみと同情がいや増しに募ることになる筈である。

(5) 有吉作品のテーマの普遍性について

『和宮様御留』のテーマについて、文芸評論家の篠田一士氏はこの作品の文庫本の「あとがき」で繰り返し次のように述べている。「公武合体を目指した和宮東下という、幕末における、まぎれもない歴史的事件が枠組となり、同時に、その内実をまさぐることが、一応というか、かりそめの主題になっている」¹⁾と断った上で、「この小説の本筋は、少女フキの短い生涯の物語であって、それ以上のものでもなく、それ以下のものでもない。」²⁾「この作品の主題が何かといえば、そこには、残酷な運命に見舞われながら、それから逃げる力をまったく持っていない、一人の可憐な女性の生のありようで」³⁾ある。

作者の有吉自身も、この作品のテーマについて、まず本作の自身の「あとがき」で「たとえばフキは、赤紙一枚で召集を受け、どこへ行くのか、なんのために知らされぬまま軍隊に叩き込まれ、その生活に適性を持たぬままに狂死した若者たちと少しも変わらない。……私はフキを、敗戦に終わった太平洋戦争の犠牲者の中でも、最も無力であった人々に対する鎮魂歌として書いた」⁴⁾と述べている。更に別のところで、有吉はこうも語っている。「私は女だから女を書くという単純な理由じゃなくて、あまりにも多くの女が存在をないがしろにされてきたではないか、……おそらく『和宮様御留』の中でも、私自身が持っている一つ

の歴史に対する不満、これまで書かれてきた歴史に対する不満というものが形をなして、女を忘れていませんかということが本軸になっているかもしれません。』⁵⁾

篠田氏の評言にしろ有吉の意図や目論見に対して、筆者はいささかも異論を挟みはしないし、逆に真に適切な意見であり、さも有りなんという感想を持つことは確かである。しかし、ここで筆者にはどうしても、一つの疑念が湧いてくることも否定出来ない。それはどういうことかというと、確かに一人の名もなき婢の、時代と大人たちの勝手な利害に翻弄されて、若くて短い人生をメチャクチャにされ、挙げ句の果てに狂死という正視に耐え得ない、果敢なくも惨めな人生に同情するし、かつ感動もするのだけれども、それだけでかくも深く重い感動を呼び起こされるものであろうか。つまり、この哀れな一少女と彼女を取り囲む者たちとの間に、もっと本質的で普遍的なテーマが隠されていはいしないだろうか？ という疑問である。

筆者の考えでは、篠田氏と有吉の言説や評言に見られるだけでも、そのテーマに十分普遍性が認められることは間違いないであろうが、更にもう一步踏み込んで言えば、いささか唐突の感を免れないかも知れないが、フキは一種のイエス・キリストではなからうか。つまり、すべての人々の罪を一身に背負って磔刑に処せられた、あのイエス・キリスト。有吉の大学時代の同窓であり、多くの有吉作品の脚本を担当した、劇作家の大藪郁子氏が「彼女（＝有吉）の文学の真価は主題の永遠性だと思う」⁶⁾と語る時、そのような意味合いが含まれているのではなからうか。（傍点は筆者）

『和宮様御留』を読んで、その深く重い感動に心を揺さぶられるのは、キリスト教の影響下で生まれ育まれた芸術作品である絵画や音楽などを鑑賞した際に経験するものと通じ合うのではなからうか。音楽でいうならば、例えばベートーヴェンの『第九』、チャイコフスキーの『悲愴』、マーラーの『交響曲第五番』等々。絵画ならば、聖書に題材を得た数々の宗教画。喩え、キリスト教のキの字も知らない人々が、人間存在の根幹に関わる、様々な心の在り様や感情の機微を映し出す西欧精神や芸術に触れて、いたく感動するということも有り得る筈だ。

有吉の年譜を繙くと、昭和二十二年（1947）十六歳の時、光塩高等女学校（光塩女学院）在学中カトリックの洗礼を受けている⁷⁾。また、「学生時代にはカトリック学生連盟に入りキリスト教の実存哲学者ベルジャエフに傾倒した」⁸⁾ともある。

もちろん、『和宮様御留』という作品はキリスト教世界とは何ら関係がないし、有吉自身もそこにキリスト教云々を意図しようとした訳でもないことは、上述の本人による引用文で明らかである。しかし、有吉の主な長編小説の女主人公が、総じて異様とも言えるほどストイックで、自己に忠実であろうとし、もがき苦しみながらも健気に生きていこうとする姿が描かれていることは誰しも認めるところ

であろう。それすらもキリスト教とは直接関係はないのだが、有吉の生来の資質と相俟って心のどこか片隅に、かつて若い頃キリスト教を受け入れ、慣れ親しんだ精神の内実が醸成され、時を経て葉となり花となって表象されたと言えなくもなからう。有吉作品が、多くの他のエンターテインメントと一線を画す秘密は、この辺りにも潜んでいるのではなからうか。

おわりに

有吉佐和子はこの小説の題名を決定するにあたり、どうして『和宮様御留』としたのであろうか。例えば「和宮様降嫁」とか「和宮様東下」でもよかったし、実際決定する前には、これらを候補に上げたかも知れない。この“和宮様御留”という表現は、小説中では宰相典侍の庭田嗣子の日記とか覚え書きの意味でそのまま使われている。資料によれば、庭田嗣子の場合は自筆による『和宮御側日記』¹⁾があり、一方和宮の生母である観形院の『観行院手留』（12冊）の総名の下にまとめられている中で、「和宮さまおとめ」が一冊の日記帳として扱われているようだ²⁾。そうすると、有吉はこれら二つのケースをミックスして、庭田嗣子の記した「和宮様御留」としているように考えられる。そこから浮かび上がってくる一つの推測として、この小説は有吉佐和子による日記体「和宮様御留」ではないかと考えられる。実際、この小説の目次を見ると、「その一 万延元年〇月×日」³⁾のように、如何にも日記形式で書かれている。

このことは何を意味するであろうか。これまでに述べてきたように、この小説は、一応は史実に沿って描かれているけれども、「史料をねじまげておりませんし、史料のありったけのものは使っております」⁴⁾が、史実そのものではない。それどころか、有吉流に「豪華絢爛に」⁵⁾脚色した読み物ですよ、という密かな訴えを含むことにはならないだろうか。

註

はじめに

- 1) 有吉佐和子著『和宮様御留』講談社文庫「解説」1981年
- 2) 和宮替え玉説批判の代表的な例として、「角田文衛が『和宮身替り説を駁す』（昭和五十三年十月『歴史と人物』）で批判している」を挙げておく。日本歴史文学29『和宮様御留 華岡青洲の妻』講談社 別冊付録「歴史文学ハンドブック」中の、尾崎秀樹著「歴史文学夜話 <31>」24頁
- 3) 同上書『和宮様御留 華岡青洲の妻』457頁
「対談 皇女和宮の謎」（昭和五十四年十二月、日本放送出版協会刊『歴史への招待2』より転載）
「小説にとって一番大切なのは、これが本当かうそかということではなく、これがどれだけリアリティをもって、読者をどれだけ説得できるかということに小

説の値打ちがあるわけです。」また、上記の『和宮様御留』（講談社文庫）の「解説」で篠田一士氏は、あたかも有吉と口裏を合わせるかのように、次のように述べている。「この『和宮様御留』を、一篇の醇乎たる小説、もっとはつきりいえば、歴史小説とよぶことさえ必要でなく、ただ純粋なロマネスクとして読むならば、史実がどうの、史料がどうのという配慮は一切無用ではないか。」 391頁

(1) 和宮とその時代

- 1) 武部敏夫著『和宮』 吉川弘文館「人物叢書」新装版 1987年 4頁
- 2) 同上書 24頁
- 3) 同上書 47頁
- 4) 同上書 86頁
- 5) 同上書 215頁

(2) 和宮替え玉説の誕生

- 1) 有吉佐和子著『和宮様御留』講談社 1978年 368頁
- 2) 前掲書『和宮様御留 華岡青洲の妻』 442頁
- 3) 同上書 同頁

(4) 「コンコンチキチン、コンチキチン」について

- 1) 読者にいかに説得力を与え、リアリティを感じさせるかという意味で、「なるほど!」と、思わず膝を打ちたくなるような、有吉の「創造の方法」の一端を示しておく。

和宮の降嫁も決まって、東下りが真近に迫ってきた頃、生母の観行院は、和宮の育ての親の一人とも言うべき、兄の宰相中将橋本実麗に、一度偽和宮（＝フキ）に会わせておく必要に迫られ、桂御所で面通しをすることになる。何も知らない実麗だったが、偽和宮を一目見てすぐに正体を見破るけれども、そばに控える観行院は、素知らぬ顔で嘘をつき通す。その後、二人は別室に移って、観行院は暗に真実をほのめかすのだが、実麗にしてみればまさに驚天動地の心境で、しかしそのまま事態を見守るしかなく、自邸に帰ると、あまりのショックで玄関の所で気を失い倒れてしまう（この辺には、ユーモアさえ感じられる）。これが元で、実麗はすっかり気力も体力もなくして、ついに予定

していた和宮の東下に付いて行けなくなってしまう。

実は、史実として、あらかじめ和宮の東下りに随行して行くことに決まっていた実麗は、病気を理由にこれを辞退していることになっている。この理由の空白を有吉は、上で述べたような創作で埋めているという訳である。

(5) 有吉作品のテーマの普遍性について

- 1) 前掲書『和宮様御留』講談社文庫 390頁
- 2) 同上書 394頁
- 3) 同上書 395頁
- 4) 前掲書『和宮様御留』 370頁
- 5) 前掲書『和宮様御留 華岡青洲の妻』 459頁
- 6) 井上 謙・半田美永・宮内淳子編『有吉佐和子の世界』翰林書房 2004年 26頁
尚、本書は有吉の没後20周年を機に刊行された。
- 7) 同上書 277頁
- 8) 『新潮日本文学アルバム71 有吉佐和子』新潮社 1995年 15頁

おわりに

- 1) 前掲書『和宮』 243頁
- 2) 同上書『和宮』 243頁
- 3) 前掲書『和宮様御留』 2～3頁
- 4) 前掲書『和宮様御留 華岡青洲の妻』 457頁
- 5) 同上書 同頁

尚、上記以外の参考書を以下に挙げておく。

- 1) 川口松太郎著『皇女和の宮』朝日新聞社 1953年 文庫版は徳間文庫 1988年

本書は、和宮降嫁という枠組みは堅持されながらも、作者の想像力が遺憾なく発揮されていて、有吉の場合よりも更に大胆・奔放に創作されている。

- 2) 川端康成著『美しさと哀しみと』学習研究社「現代日本の文学16」 1969年 137～140頁 本作で、川端は和宮降嫁のエピソードを取り上げ、美しきものは哀しさを湛え、哀しさはまた美しくもある、ということの暗示として描いており、これは川端美学の一端を示すものと考えられる。

要 旨

有吉佐和子の小説『和宮様御留』（1978）は幕末から明治にかけての時代に、「公武合体」の名目で皇女・和宮が將軍・徳川家へ降嫁したという、紛れもない史実に沿いつつ、実際に嫁いだのは和宮本人ではなく、替え玉だったという作者の大胆な推理に基づいて、一人の若い少女の悲運を描いたものである。文芸評論家の篠田一士氏も述べているように、重要なのは物語が事実かどうかではなく、読者に如何にリアリティを感じさせ、ひいては感動へと誘うか、である。このことは、作者の有吉自身も強く主張しているが、本作においては、それが見事に成功し、結果として、物語創作における事実と虚構という重要な側面を明解に示すことになり、同時に作者の「創造の方法」の一端を垣間見ることが出来る。

この小説『和宮様御留』の真の主人公は、徳川家へ嫁す筈であった当の和宮ではなく、その身代わりとなったフキという十四歳のいたいけな少女である。彼女は和宮の生母である観行院の兄・橋本実麗の屋敷の一婢でしかないが、かねてより和宮の替え玉に思いを巡らせていた観行院の目に留まって、一切の説明やフキ本人の承諾などなしに、いきなり桂御所へ上げられ、そのまま和宮の身代わりとなり、ついにはその重責に耐えられず狂死してしまう。この、いわば小動物にも似た健康で純粋な、汚れを知らない少女が、周りの大人たちの勝手な思惑や都合で、短い生涯を翻弄される様は、あたかも全ての人間の罪を一身に背負って十字架にかけられたイエス・キリストを彷彿させて、読者の精神の最深部へ訴えかけないではおかぬであろう。